

## 中津城(中津川城, 扇城, 小犬丸城, 丸山城) (続百名城) (大分県中津市二ノ丁)

中津城(なかつじょう)は、豊前國中津(現在の大分県中津市二ノ丁)にあった城。黒田孝高(如水)が築城し、細川忠興が完成させた。中津藩の藩庁が置かれた。

### 構造

周防灘(豊前海)に臨む中津川(山国川の派川)河口の地に築城された梯郭式の平城である。堀には海水が引き込まれているため、水城ともされ、今治城・高松城と並ぶ日本三大水城の一つに数えられる。本丸を中心として、北に二の丸、南に三ノ丸があり、全体ではほぼ直角三角形をなしていたため扇形に例えて「扇城(せんじょう)」とも呼ばれていた。櫓の棟数は22基、門は8棟。総構には、6箇所(虎口)が開けられた。

中津城は、冬至の日には、朝日は宇佐神宮の方角から上り、夕日は英彦山の方角に落ちる場所に築城されている。また、吉富町にある八幡古表神社と薦神社とを結ぶ直線上に位置する。鬼門である北東には、閻無浜神社がある。

### 天守

天守の存在については不明である。江戸時代の絵図には天守は描かれていない一方、黒田孝高(如水)の手紙には「天守に銭を積んで蓄えた」とあり、天守の存在をうかがわせる記録もある。江戸時代後期の「中津城下図」には、中津川沿岸の本丸鉄門脇に三重櫓が描かれているのみである。

### 堀・石垣

中津城に残る黒田孝高(如水)が普請した石垣は、天正16年(1588年)に普請された現存する近世城郭の石垣としては九州最古のものである。本丸上段北面石垣(模擬天守北面下)は、黒田氏の石垣に細川氏が石垣を継いだ境が見られる。また、本丸南の堀と石垣は、中津市によって修復、復元されている。ここにも黒田・細川時代の石垣改修の跡を見ることができる。

### 歴史

- 天正15年(1587年) - 黒田孝高(如水)が、豊臣秀吉より豊前国6郡12万3000石(一説には16万石・その後の検地で18万石となる)を与えられる。当初、馬ヶ岳城に入城した。
- 天正16年(1588年) - 黒田孝高(如水)は、領地の中心である山国川河口に中津城の築城を始めた。
- 同年-熊本の一揆征伐で黒田孝高(如水)が中津城を留守の間に、嫡男の長政は、敵対していた城井鎮房(宇都宮鎮房)を中津城内に引き入れて、惨殺する。
- 慶長5年(1600年) - 黒田家は関ヶ原の戦い時に、徳川方につき、中津城から西軍の所領を攻めた。長政の戦功により筑前52万石に加増、名島城に転封となり築城が中断される。
- 同年 - 細川忠興が豊前国と豊後国2郡39万石で入封。大修築を開始する。
- 慶長7年(1602年) - 小倉城築城に着手し、忠興は小倉城を主城、居城とする。修築中の中津城の城主は細川興秋になる。
- 元和7年(1621年) - 扇形の縄張りに拡張され、中津城が完成。
- 寛永9年(1632年) - 細川家の熊本藩転封に伴い、小笠原長次が8万石で入封し事実上中津藩が成立。以後、中津城は中津藩藩主家の居城となる。
- 享保2年(1717年) - 奥平昌成が10万石で入封。明治維新まで奥平家の居城となった。
- 安政3年(1856年) - 海防強化のため、海から城への入口に当たる山国川河口(現在は支流の中津川河口)の三百間突堤に砲台を建設。
- 文久3年(1863年) - 本丸に松の御殿を新築する。この御殿は小倉県、福岡県、大分県の中津支庁舎として転用された。

- 明治2年(1869年) - 版籍奉還によって府藩県三治制下における中津藩の藩庁が置かれる。
- 明治3年(1870年) - 中津藩士福沢諭吉の進言により御殿を残し、その他建造物を破却する。
- 明治4年(1871年) - 廃藩置県により中津県の県庁が置かれる。同年、小倉県に併合され中津支庁が置かれる。
- 明治10年(1877年) - 西南戦争の際、西郷隆盛挙兵に呼応した増田宋太郎率いる中津隊の襲撃により中津支庁舎であった御殿が焼失する。
- 昭和39年(1964年) - 旧藩主奥平家が中心となり、市民らの寄付を合わせて模擬天守が建造される。
- 平成19年(2007年) - 模擬天守等の建築物を所有する中津勸業が、土地、建物を、中津市や民間企業に売却する方針を示す。
- 平成22年(2010年)10月4日 - 中津勸業が模擬天守等の建物を埼玉県の企業千雅に売却することを決定。
- 平成23年(2012年)5月、千雅が管理運営を一般社団法人中津城に移管する。

Wikipediaによる

